

第三百三十四回 青葉会

平成二十六年正月五日(日) 吉例初芝居総見・新橋演舞場(昼の部)

一月二十三日(木) 初句会・丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子

朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中野一灯 山内天牛

小早健介 福島正明 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 楠田彦十 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明

星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

ゴシックは撰者の天

《選者吟》

息白く吐きつつ郷(くじ)の走者待つ

万里子 (忠・弘・堂・灯・く)

棟上げや鴉ら呵々と寒日和

全 (恭・青)

(青：鴉のKA、呵々のKA、寒日和のKA。技巧の冴えた句です)

味噌汁の旨さ新し小正月

全 (天)

お年賀をやつと書き終へ抽選日

全 (啓)

父の書を吉書始めの手本かな

全 (龍)

(孤：下五「手本とす」のほうがよいと思いますが)

《互選句》

九点 ☆ じじの株たちまち上る独楽廻し

堂哉 (万・猛・忠・弘・恵・ゆ・允・青・天)

七点 ☆ 酔漢の家路を知るや暮の月

そらお (堅・恭・彦・堂・正・啓・三)

☆ 初髪の跳ね治まらぬまま銀座

弘子 (万・孤・彦・恵・灯・允・正)

☆ 着ぶくれてパンダの行く方行く方へ

全 (万・恭・五・恵・青・三)

☆ 雪国へネオン離るる夜行バス

一灯 (万・そ・紀・敏・堂・隆)

☆ 冬空の真青(まさむ)に登る観覧車

恵洲 (孤・弘・灯・隆・允)

☆ 令室の賀状に友の甦える

ゆたか (万・紀・忠・孤・龍)

(元ミラノ駐在の富永廣さん)

☆ たて髪をつららきらめく寒立馬(かんだらめ)

一灯 (万・猛・ゆ・允・く)

(☆：「たて」「きらめ」は漢字に)

四点 鱸酒や大海原に光射す

盛雄 (堅・そ・孤・五・敏)

☆ 七草を叩く音もす祇園の夜

忠彦 (猛・恭・堂・青)

あと幾歳酒の友やら海鼠囁む

五郎太 (万・堅・正・三)

去年の鐘今年の鐘と響き合ふ

健介 (猛・恭・恵・く)

襟足に見とれて拝む初詣

堂哉 (堅・彦・龍・啓)

達筆に読めねどめでたき賀状かな

昇 (猛・恵・敏・啓)

大寒や日ごとに涙もろくなり

忠彦 (そ・灯・天)

(青：「日ごと」は少し大袈裟だから「年々」ぐらいにしてはどうか)

イヤフオンの初耳学問初芝居

全 (彦・恵・隆)

裂帛の声の剣士や初稽古

天牛 (そ・弘・青)

三家族集いて祝う鱒雑煮

恵洲 (紀・弘・正)

☆ 磁石もて恵方を探り一万歩

堂哉 (弘・ゆ・く)

枯蘆や朽舟水漬く舟溜り

ゆたか (五・隆・正)

一般若湯を飲み尽したる寒の入り

一灯 (万・ゆ・く)

景清に馴染まぬジョンガラ初芝居

全 (孤・ゆ・く)

全 正明 (龍・敏・天)

全 (紀・天・三)

二点

病臥して終日眺む冬の雨

規雄 (忠・隆・啓)
そらお (万・忠)

☆ あつかん来て故人の話題ぼつぼつと

(☆:「あつかん」は漢字に)

枝ごとにつぼみが並び梅日和

全 (龍・隆)

☆ 初詣雷門に華語戻り

紀久男 (万・三)

☆ 幕間(まくあひ)に同門美妓と御慶かな

全 (万・三)

(河東節仲間の新橋芸者とぼったり)

一輪の福寿草から気をもらふ

猛 (堅・ゆ)

初詣願ひ一年十秒で

忠彦 (堅・猛)

山門の朱の色映ゆる京の春(大徳寺)

五郎太 (敏・允)

綿雲のやうな襟巻新成人

弘子 (灯・青)

オリオン北斗その余は知らず冬星座

惠洲 (彦・龍)

海老蔵の切りし大見得春祝ふ

ゆたか (五・灯)

(紀:見得をする。rきめるだが、近頃、「切る」の誤用が字引にも載ってます)

豆腐売る霜焼の手を水に漬け

一灯 (恭・天)

緞帳の海老の凶柄や初芝居

天牛 (孤・彦)

寒柝(かんたく)やぐくろうさまと声をかけ

全 (五・堂)

児等元氣ひらがなだけの年賀状

そらお (忠)

末廣亭(すえひろ)へゆく権太楼と御慶かな

紀久男 (五)

(地下鉄で隣り合せ。志ん馬急逝を悔む)

濠の水ビルの冬窓揺らしをり

恭延 (そ)

裸木や一枝一枝に日の光

全 (そ)

飲みたくて新年会と云ひ集ふ

猛 (堂)

初詣御神籤に聞く処世訓

全 (正)

金柳大きく結ぶ年始

五郎太 (正)

☆ 田作を少しあぶりてもう一献

全 (万)

椿咲くとき待ちわぶ禅の寺

全 (そ)

海老蔵の睨みの見得や初芝居

弘子 (敏)

年下のまた居て冬の訃報欄

惠洲 (啓)

幼児の追羽子十に届かざる

堂哉 (天)

ポストまでコート羽織るや寒四郎

全 (紀)

株相場横目に日だまり老の春

ゆたか (そ)

元朝の「朝日俳壇」輝けり

規雄 (紀)

遺言を秘めし日記や明の春

盛雄 (紀)

●次回青葉会

二月二十七日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲兼題「寒明け」一句以上 当季雑詠併せて五句迄 投句二句

以上 文責 紀久男

平成二十六年一月句会報

一 新開場の歌舞伎座（藤十郎、吉右衛門、幸四郎ら）、国立劇場（菊五郎ら）、新橋演舞場（海老蔵ら）、浅草公会堂（猿之助、愛之助ら）の正月東京四座の歌舞伎はいづれも大入り。当会吉例総見を演目、役者を比べて演舞場に決め、万里子先生以下10名参加。歌舞伎十八番の荒事四作をつなぐ海老蔵のアイディア満載の趣向ですが、出来映えいまひとつでした。（べた褒めの劇評家あり）

二 初句会は先生以下13名出席。投句5名。紙上選句12名。天牛さんの音頭で乾杯してから開始。久しぶり大阪から上京の堂哉さんがトップで、弘子さん、一灯さんが高得点でした。

先生寄贈の「潮見せんべい」（広島・角島）、チョコレート・おかき、弘子さんの坂角「海老煎餅」（東海）堂哉さんの榮久堂吉宗の饅頭（豊中）、天牛さんの「美々卯」凍結酒、恵洲さんの「吟醸澤乃井」、忠彦さんの「大七」純米（福島・二本松）、一灯さんの紹興老酒8年物（景德鎮の壺入り2本）、小生の「峰乃白梅」大吟醸（新潟・桐箱入り一升壇）と飲ん兵衛句会の新年会らしく大盛会でした。

〔回覧〕 孤舟さんからの「俳句四季」一月号「爽樹」一月号「丘の風」慶大俳句丘の会100回記念号、盛雄さんからの「季流」創刊20周年記念号、清水潔さん（俳句あるふあ）からの「扉を開けると・・・」江戸座合同句集。正明さんからの演舞場玄関スナツプ等。

〔庄司さん囲む会〕 午后四時から句会始まる迄、一年ぶり歓談しました。

御友人の石川さん（旧姓丸山さん。凶師宍三さんと高校同期。住金OB）、藤倉健次郎さん、小畑克之さんらに天牛さん、恵洲さん、堂哉さんも加わり盛上りました。龍平さんは句会途中まで見物されてから帰阪されました。

三 関係者近詠

大樹巻く蔓から早も冬黄葉

万里子 病床にわれも一人や冬の蠅

規雄

立冬や風雨に続く土石流

全 少年の十二月八日白のまま

大串章選

転んでも泣かぬ乙子と落葉径
悴むや銀杏の雌雄の謎に触れ
献血適ふやつとの体重山眠る

全 四方山の神に黙礼歟はじめ
全 地の底のマグマは知らぬ春の土
全 やわらかき光を連れて別れ霜
全 神々の寝所は長屋虫の闇
全 卒業は長き旅路の始発駅
全 無人駅梅の蕾の固さかな
全 巡り来ぬ八とせの春列車事故

盛雄
全 健介
全 全

木枯へ瞳を張り伴侶の死を告げし

全 眞希子

マンシヨンの鉄の戸人も冬も断つ

全 着ぶくれて怒りがやがて哀しみに

全 盛雄

擬宝珠の種黒く爆ぜ志士生家

全 弘子

冬曇写生に低き椅子据ゑて

全 除染中の札に息呑む其の冬庭

全 健介

菊坂をパン屋へ降るる冬の朝

全 恭延

バス停の暫しの友や冬櫛

全 猪鍋やとなりの部屋の麻雀台

全 允章

墓参り里の山脈霞みをり

全 日矢射すや燃え盛りたる冬紅葉

全 全

大看板の休演

顔見世のお目当て居らぬ不入りかな

全 紀久男

大根に実家の土の香宅急便

全 忠彦

黄落やわれは未熟の青のまま

全 争へば白鳥荒き野性見す

全 恵洲

大きくしやみ心当りの無くもなし

全 演垂のメンコ強そな面構へ

全 全

「萬緑」二月号

星月夜宇宙遊泳する胎児

全 孤舟

永劫と刹那のあはひ流れ星

全 淑気満つ三津五郎父子の稽古かな

全 全

今年また一茶の雪となりにけり

全 行く年やウオツカ・筋子に小雪舞い

全 龍平

（一茶忌全国俳句大会 宇多喜代子特選）

「爽樹」1月号

全 今朝の春みんな「中吉」孫スマホ

全 賀状減かの方からもついに絶ゆ

平成二十六年二月七日

紀久男記